

追悼文集 石川洋明先生

今日6月30日で、石川洋明さんが亡くなって6年になる。久しぶりに写真の「追悼文集」を手にとった。表紙の似顔絵は、名古屋市立大学人文社会学部で毎年実施している、「ようこそ大学へ！施設の子どもたちへの学習支援」というイベントで使用したものである。石川さんの表情がよく出ている。



石川さんが亡くなったのは、私が退職して3ヶ月後のことだ。石川さんについてレポートを10本ほど書き、それをもとにして追悼文を寄稿した。そこに次のように書いている。

卒業式を終え、いよいよ私の退職の日を迎えた。辞令をもらってから、教職員の皆さんにお礼のメールを出した。すると彼からすぐに返信が届いた。

私が退職後はゆっくり仕事をしていきたいと書いたのに対し、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です。」そして「くれぐれもお体にはお気をつけておすごしください(病気は私だけで十分です)」とあった。石川さんのお通夜と葬儀の席で、このメールのコピーを何度も読み返して涙した。

石川さんについては、追悼文集にも収録されているが、中日新聞2015年2月10日から14日まで、「未完の論文 ある社会学者の死」として連載された。石川さんと付き合いのあった安藤明夫編集委員による連載であり、大きな反響を呼んだ。

第1回の最後から一打ちのめされ、絶望してもおかしくない悲劇が重なる中で、石川は気力を奮い立たせた。愛する妻子を守れなかったことへの償いの思いを込め、事件の再発を防ぐための研究に情熱を注いだ。石川の終末期から、人生、仕事、家族の意味を見つめたい。

連載最後の第5回に私のコメントも掲載されている。—石川洋明の壮絶な終末期は、同僚や教え子たちに強い印象を残した。昨年春に名古屋市立大を退官した名誉教授・山田明(66)は、石川の妻が長男を殺害した事件直後、一部の新聞が夫の肩書・専攻まで載せたことに腹を立て、新聞社に抗議した。それをきっかけに石川との距離が近くなり、つらい思いを聞いて一緒に泣いたこともある。

「前は、自己主張の強い彼に反発を感じていたが、リハビリに励み、奇跡的に職場復帰を果たした姿に感動した」と振り返る。

そして連載は石川さんの次の言葉で終わる。「生きていくということは、大変なことだから、時々悪いこと(依存症や自傷など)もするでしょう。清廉潔白に生きて自殺するより、悪いことをしながらでも生きてることがずっと偉いこと、いちばん偉いことだよ」

(2020年6月30日)